

— 自閉症児の家庭における要求発語の形成 — シミュレーション指導と個別指導を通して —

飯島 徹

I 問題と目的

ことばに重篤な遅れをもつ自閉症児では、家庭における家族への機能的な要求発語の形成が重要な教育目標の一つである。要求発語の形成を高める手だてとして、直接的に家庭で指導を行うのに加えて、個別指導を活用して、反復的、系統的に要求発語の指導を行うことが有効とされている(山本, 1997)。

長沢・藤原(1996)は、日常場面において自発的な要求発語の生起を高めるためには、個別指導と日常の両場面で、同じ内容の発語指導を行うことが必要であると示唆している。

以上の研究から家庭で自発的な要求発語の生起を高めるためには、個別指導を設定し、大学の指導と家庭の両場面において同じ内容で発語指導を行うことが有効であると考えられる。

家庭における子どもの要求行動の形成を高める手立てとして、家庭の要求場面を疑似した環境設定や手続きで指導を行うシミュレーション指導がある。望月(1997)は、シミュレーション指導を活用することで、標的する要求行動の生起条件を見出すことができると示唆している。家庭で標的する要求行動の生起を高めるためには、見出した生起条件を母親に報告する手続きが重要ではないかと考えられる。

本研究では、自閉症児1名を対象に、家庭における要求行動の形成を指導目標とする。シミュレーション指導で、対象児の要求行動の生起条件を明らかにし、その生起条件を家庭の要求場面に活用することで要求発語の生起が高まるか、標的となる要求発語の発語指導を実施することで、シミュレーション指導と家庭での要求発語の生起が高まるかを検討する。

II 方法

1 対象児

特別支援学校小学部に通う1名の男児(以下、A児)。2歳半の時に、知的障害を伴う自閉症の診断を受けていた。研究開始時の個別指導では、手伝って欲しい時に「おねがい」と発語する、両手を合わせる(手をたたく動作サイン)が認められた。家庭での要求行動に関わる実態調査では、要求時にA児は母親に接近する行動が少ないこと、「おねがい」以外の発語は認められないことが課題として挙げられた。

2 実施場所・指導者

A 大学研究センターで200X年4月から12月までの約7カ月間、週1回、家庭の台所を疑似したシミュレーション指導を実施した。併せて、家庭で標的とした要求発語の指導を個別指導で行った。大学では指導者と母親が、家庭では母親が支援を行った。

3 手続き

1)事前アセスメント:母親に対して、A児の家庭における一日の要求行動の調査、A児の要求行動に対する希望調査、台所の間取り調査を行った。家庭における一日の要求行動の調査では、A児がいつ、どこで、何を要求しているか、誰に対して、どんな表現で、母親がどう応じたのかについて情報を休日も含めて2週間記録してもらった。母親の希望調査では、母親が困っている、改善して欲しい要求行動に関する内容を調べた。家庭の台所の間取りでは、お菓子の棚、冷蔵庫の位置、A児の位置、母親の位置、家具等の配置を把握した。

2)標的場面と標的行動の選定:家庭における要求行動と希望調査から大学でシミュレーション指導が可能であるかを指導者と母親が評価した。標的場面は、帰宅後のおやつ場面であった。お菓子の要求行動は、①棚に接近する、②お菓子を取る、③お皿を取る、④母親にお菓子とお皿を持って接近する、⑤母親に「あけて」と発語するという一

連の行動であった。飲み物の要求する行動は、①冷蔵庫に接近する、②冷蔵庫の前にある絵カードを取る、③母親に接近して絵カードを手渡す、④母親に飲み物の名前を発語する行動であった。

3)シミュレーション指導の設定：指導期Ⅰでは、A児が何らかの要求行動を示すと、即時に充足した。A児が示すお願いサインや接近行動などのお菓子や飲み物に対する全ての要求行動に対して、すぐに「〇〇（お菓子、飲み物の名前）どうぞ」と言い、少量のお菓子や飲み物を手渡した。A児がお願いサイン（手をたたく）をして要求対象物が分からない場合には、指導者が指さしや「どっち？」と声かけをして、お菓子や飲み物を特定化した。指導期Ⅱでは、指導者がお菓子と飲み物の標的行動を指導した。お菓子と飲み物を指導する際、標的行動の自発が困難な場合、指導者による身体ガイド、声かけなどのプロンプトを行った。指導期Ⅲでは、指導者が母親に手続きを伝えた上で母親が関わり、A児の要求行動を充足する体験を得た。指導者は母親の支援行動を補助し、母親が手続きを誤ったときは修正した。

指導期Ⅱの終了後に、母親に対して、シミュレーション指導の成果を伝える報告会を実施した。報告会では、A児からの接近を待つということ、A児がお菓子とお皿を手渡したら、5秒間待ち「あけて」と音声提示を示すという手続きを説明した。

4)個別指導での要求発語の指導：A児と指導者は、机を挟んで対面し着席した。お菓子の要求に関わる発語の内容は、「あけて」の行為要求であった。課題場面に、パズル切片やおはじきなどの教材の入った課題箱を用意して、A児が開けられないような発語要求の機会を設定し、「あけて」の指導を行った。飲み物の要求に関わる発語の内容は、お茶、牛乳、水、カルピス、コーラ、ジュース（アクエリアス）であった。飲み物の絵カードの名称を発語する課題と指導者の音声提示した絵カードを取る課題を設定した。

5)結果の処理：シミュレーション指導と家庭において、お菓子と飲み物の標的とする要求行動が生起している割合で評価し「各標的行動÷機会数×

100」で算出した。母親がA児に支援した行動を回数で示した。

Ⅲ 結果

1 お菓子の標的行動について

図1に、シミュレーション指導と家庭のお菓子の標的行動の反応型を示した。シミュレーション指導において、指導期Ⅰでは、棚に接近する、お菓子を取る要求行動が最も多かった。同様に、この期では、家庭でも、棚に接近する、お菓子を取る要求行動が多かった。シミュレーション指導の指導期Ⅱでは、指導期Ⅰで認められた棚に接近するとお菓子を取る行動に加えて、お皿を取る、お菓子とお皿を持って母親に接近する、お皿を「あけて」と発語の3つが新たに認められるようになった。この3つの要求行動は、家庭でも認められた。

図2に、母親に接近する行動のプロンプトレベルの割合を示した。指導前期、指導期Ⅰでは機会なしであった。指導期Ⅱの報告会后、音声提示によって接近する行動が認められた。指導期ⅢではA児が母親に接近する行動が自発レベルへと向上した。

2 飲み物の標的行動について

シミュレーション指導の指導期Ⅰと家庭のⅠで

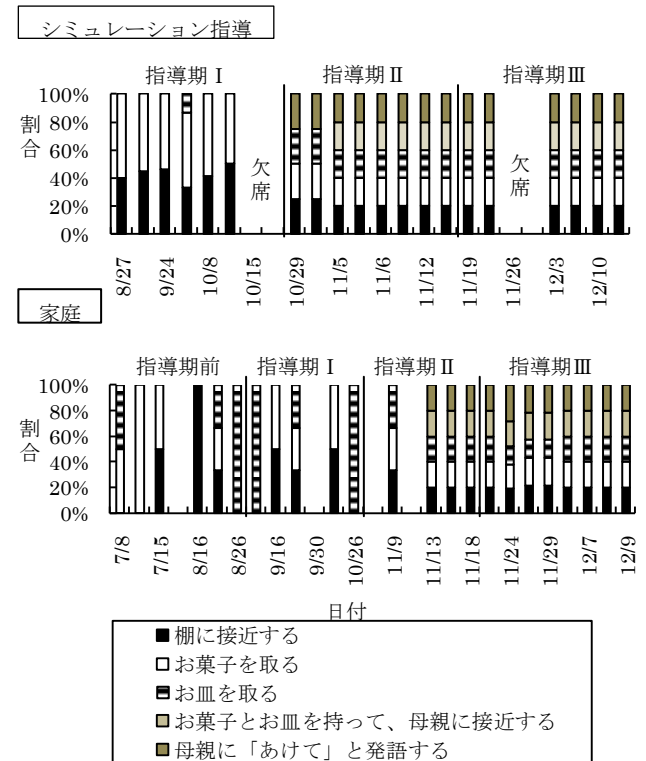


図1 お菓子の標的行動の反応型

は、冷蔵庫に接近する行動が最も多かった。シミュレーション指導の指導期Ⅱでは、冷蔵庫の前にある絵カードを取る、指導者に接近して絵カードを手渡す、指導者に飲物の名前を発語するという3つの項目が新たに認められた。家庭では、冷蔵庫の前にある絵カードを取ると母親に飲み物の名前を発語する行動は認められたが、母親に接近して絵カードを手渡す行動が認められなかった。

3 家庭における母親の支援行動について

図3にお菓子に対する母親の支援行動を示した。指導期Ⅱの報告会后、母親は、A児から離れて「こっちに来て」と呼びかける支援行動が認められるようになった。母親に「あけて」と発語する行動では、母親が、A児に対して「あけて」と音声提示を促す支援行動が認められるようになった。

IV 考察

指導前期では、家庭において、A児がお菓子とお皿を持って直接テーブルに行く行動が多かった。母親は、A児がテーブルにつくと、自らテ-

ブルに近づき、お菓子の袋を開けた。A児が要求充足者である母親に接近する機会がなかったと考えられる。報告会后、A児は、母親にお菓子とお皿を持って接近する行動が自発レベルで認められるようになった。この結果は、シミュレーション指導で見出した要求行動の生起条件を家庭において母親が支援実行したからであると考えられる。要求行動の生起条件を見出すためにシミュレーション指導が有効であった。シミュレーション指導で対象児の要求行動を形成することと併せて、生起条件を伝えるといった家族への支援も重要であると考えられる。伝えられた生起条件を家族が実行することで、家庭での対象児の要求行動の生起を高めると考えられる。

家庭での要求場面を考えると、家族は家事や仕事などの活動をしていることが多く常に対象児に注目することは困難であると予測される。対象児の棚の前で立つという要求行動では、家族が近くにいないければ、要求に気づくのは困難であると考えられる。A児が家族に対して、確実な要求行動を伝えるには、自分から家族に近づいて要求するという接近行動の形成が必要であろう。

A児が母親に対して、「あけて」の発語による要求をするようになったのは、接近して発語で要求することで、要求意図がより伝わりやすく、充足されるという成功体験を得たためと考えられる。A児の要求発語を支えるためには、家族への接近行動と要求対象物を明確にする発語によって、確実に充足される体験を得ることが重要であると考えられる。

文献

望月昭 (1997) コミュニケーションを教えるとは?—行動分析学によるパラダイム・チェンジ—. 小林重雄 (監修) 山本淳一・加藤哲文 (編著) 応用行動分析学入門. 学苑社. 2-25.

長沢正樹・藤原義博 (1996) 自閉症児の音声に伴う要求言語行動の形成—精神薄弱養護学校の日常場面での試み—. 行動分析学研究, 9, 128-136.

山本淳一 (1997) コミュニケーション行動の般化とその自発的使用. 小林重雄 (監修) 山本淳一・加藤哲文 (編著) 応用行動分析学入門. 学苑社. 121-138.

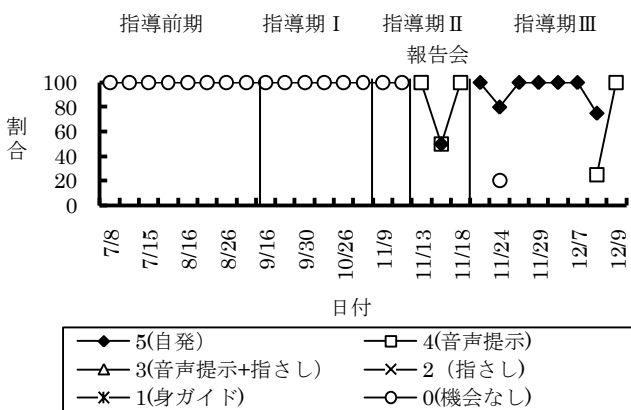


図2 母親に接近する行動のプロンプトレベルの割合

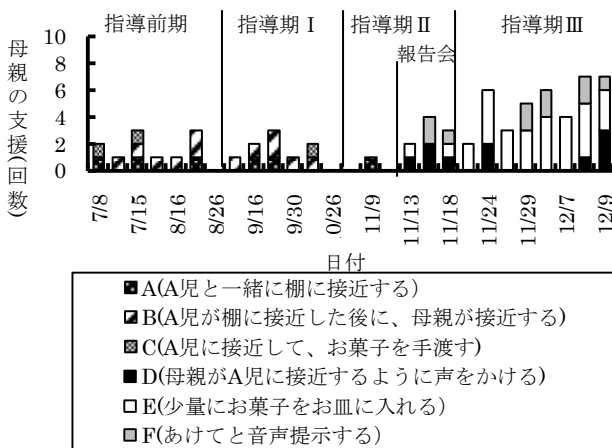


図3 お菓子に対する母親の支援行動